

近代詩

吉 田 精 一

III

日本文學教養講座

近代詩

吉田 精一

III

日本文學教養講座

昭和二十五年十月十五日 發行
昭和二十七年一月二十五日 十四版發行

日本文學教養講座第三卷
近代詩

定價金貳百圓

著者 吉田 精一

發行者 佐藤 正 叟
東京都新宿區拂方町二七

印刷者 小 泉 昭
東京都港區赤坂田町六ノ六

發行者 至 文 堂
東京都新宿區拂方町二七

電話九段(33)一四一五番
四四六六番
振替東京二九五〇七番

三協印刷株式會社印刷

.....切.....取.....線.....

日本文學教養事典 引換券 No. 1

日本文學教養講座 第三卷
第一回本「近代詩」添附

日本文學教養事典引換券は日本文學教養講座全十四卷の各卷に添附してあります。

引換券全十四枚取揃へ御送附の方に上記の日本文學教養事典を贈呈いたします。

東京都新宿區拂方町二七 至 文 堂

序　　文

私の聴いたところでは、この叢書の企畫はかなり慾ばつてゐて、一般的な啓蒙書、教養書であると同時に、高等學校あたりの教科書にのつてゐる作品の解説、参考書となるやうなもの、それでゐて中等、高等學校の先生達にも役に立ち、又學生生徒諸君にとつても高級な参考書になり、その上に専門家にとつても、若干の學術的な意義をもつものでありたいといふのである。二頭の馬を御すのでなくて、三頭の馬を同時に御すのである。うまく行つたらおなぐさみといふほかはない。

とりわけて私の擔當した近代詩は小説、評論にくらべて、又短歌や俳句にくらべて、難道である。少くとも私にとつてはさうだ。第一にそれは未墾の野だ。明治時代の詩史は日夏耿之介氏や北原白秋の著述があつて参考になる。しかし大正、昭和の詩史は殆ど何一つない。さうして資料には何よりも詩専門の雑誌類が必要なのだが、多くは同人雜誌式のもので中々手に入らぬし、單行本を集めるだけでも容易ではない。

序 文

第二には、近代詩——ことに大正・昭和以後の詩は、主義に於て、理論に於て、相容れない數箇の流派が對立し、一方の詩を認める詩人、評家は、全然他をみとめない。ところで、あく迄客觀的に公平な見地からこれをさばいて行く史家としては、フレキシブルな感受性と、廣汎な理解力が必要である。しかも詩内部に於ける分派や對立は、傳統的形式である短歌や俳句内部に於ける如き生やさしいものではない。(私はシュールレアリスムやキュビズムの短歌や俳句のあるを知らぬ。ダダイスムすら見當るまい)さうして自分では多少わかつたつもりでも、これをくだいて説明するといふことが如何に困難であるかは、すこしく近代詩に親しんだ人の、容易に首肯する所だらう。

第三にそれでもわかればよい。ところがわかりにくい詩があるのだ。わからない詩は價值がないと片づけられればよい。しかしそれがさうも云ひ切れない以上、十分にわからなくとも、わからうとする努力をせねばならぬ。少くとも現在の私には十分に價值のわかりにくいながら面白味のある、もしくは面白さうに思はれる詩がある。或はそれが、まやか、しものかも知れない。恐らくそれはもう少し時間を置いて、時劫ときせきの秤はかりにかけなければなるまい。近代詩人はどのジャ

ンルよりも明晰な詩論、文學理論を意識的にもち、それを中心に創作活動をしてゐる。その文學理論は多くヨオロッパの近代のものである。私もヨオロッパの理論及び詩作について知識をもたうと努めてゐるが、もとよりそれは知れたもので、一派に執する諸詩人のやうに、それぞれの主張を主體的につかんでゐるとは云へない。されば自分の知識と趣味を以てわり切る勇斷をもたない。結局は自からの鑑賞力と理解力に俟つより仕方がないとはいへ、峻烈であるよりは、寛容を以て臨まうとしたのである。

さて、私は冒頭に敍べたやうに三頭の馬を御して近代詩の發展をたどるにあたり、なるべく立ち廻つて、企畫に沿ひながら、露骨な啓蒙者としての性格を目立たせず、最初の明治大正、昭和三代の詩史としても、あまり不體裁にならぬやう、研究書としても多少の學問的意義をもち得るやう、いくらか苦心して見た。たとへば發展段階の區劃に於て、やゝ冒險を試み、それによつて近代詩の發展方向をもつとも具體的に把握しようとしたのがその一である。穩當中正を旨としながら、幾分の新見、新調査をひそませたのがその二である。

しかし、さやうに研究書としても獨立した意義をもたせながら、複雑多岐な詩史を三百數十

序 文

ペーヂの中に収めるのは、この書の性質から云つて容易ではなかつた。例として採つた詩人や詩はこの書の目的に添ふべく按排せねばならぬ。従つて、重點的に視點を定めざるを得ず、當然何ペーヂかをついやすべき詩人、詩書をも、省略せざるを得なくなつたことは止むを得ない。それについては大方の了解を乞ひたいと思ふ。さうして、何よりも近代詩がどのやうな性格のものか、それがどのやうに發展して來たか、それは將來どの方向に向いてゐるかを、私の敘述のうちに讀みとつて頂ければ、この書の目的は達したものだといつてよい。

私の知る限りに於て、詩は次第に隆盛に赴きつつあり、詩人の技巧の水準は大正時代のレヴェルに比して相當に高い。近代的表現を様式としての詩の前途は多望である。今にして顧みるとき、七十年の歴史は、見放くる山脈なまの如くに、我々の背後にそば立つてゐる。

私のへつびり腰で御した馬は、その山脈の奇聳な風景を味ひつつ、どうやら無事に跋涉したであらうか。——途中でしばしば落馬する醜體はありながらも。

一九五〇年九月

吉 田 精 一

目次

第一章 近代詩の草創（明治一五——三〇年）

——新體詩抄より若菜集まで

一 新體詩の成立 一

二 新體詩と古典の傳統 一五

三 新詩の律格及び詩論 三三

第二章 近代詩の成立（明治三〇——四一年）

——若菜集より有明集まで

一 島崎藤村 三七

二 浪漫詩風 六六

目次

三 浪漫主義の傍流……………七

四 象徴詩の移入……………八

第三章 自由詩の發生と進展（明治四一——大正一〇年）

——自然主義詩より民衆派詩壇まで

一 自然主義の影響……………一〇

二 文語自由詩の隆盛……………二〇

三 象徴詩の新展開……………二九

四 理想主義の詩精神……………五一

五 民衆派詩壇の形成……………五五

第四章 近代詩形の完成より破壊へ（大正六——昭和三年）

——「月に吠える」より「詩と詩論」まで

一 萩原朔太郎	一五二
---------	-----

二 反民衆派の詩人	二〇五
-----------	-----

三 未來派・ダダイズムの運動	二三三
----------------	-----

四 プロレタリア詩の發生と進展	二三三
-----------------	-----

五 知性詩への道	二四六
----------	-----

第五章 知性詩の成立と展開 (昭和三——二〇年)

——「詩と詩論」以後終戦まで

一 「詩と詩論」と超現實派	二五七
---------------	-----

二 「詩と詩論」の分裂と新展開	二六六
-----------------	-----

三 異風詩人の群	二八九
----------	-----

四 「四季」の詩人群	三〇一
------------	-----

目 次

五 抵抗の詩人……………三六

第六章 戦後の詩壇（昭和二十年）

——戦後の復興——大家詩人——佐藤、堀口——釋迢空——四季の詩人——
伊東靜雄——プロレタリア詩——ひろし・ぬやま——「詩學」及詩雜誌
——マチネ・ポエチック——西脇「旅人かへらず」——三好豐郎

第一章 近代詩の草創（明治一五年—三〇年）

——新體詩抄より若菜集まで

一 新體詩の成立

近代詩發生の事情——新體詩の様式——「新體詩抄」の意義——新體詩の特色

西洋詩の翻譯はかなり古く迄さかのぼることができる。近世末期にいくつかの例が見える。

けれどもそれが一部の集として公けにされて、大きな影響をあたへたのは、「新體詩抄」（明治一五年1888七月）にはじまる。

「新體詩抄」は井上哲次郎・矢田部良吉・外山正一の東京大學の三教授の著である。井上哲次郎 1835—1944 によると、最初彼の所にハムレットの “to be or not to be” の部分の譯を示したのは矢田部であつた。井上はそれを見ると誠に平易にして分り易く、この調子でシェークスピアを翻譯したらば、世間に始めて西洋の詩の味ひを知らせることができよう、と考へたといふ。その翌日、偶然であつたが、外山が井上のところに同じハムレットの譯を示して、

第一章 近代詩の草創

かういふものができたと云つた。それは井上から見て矢田部のものより落ちるやうに思つた。何れにせよ、これがきつかけで、二人はかはるがはる西洋の詩の翻譯を見せた。この集録が、「新體詩抄」の主要な部分なのである。

ところでそのハムレットの兩者の譯を初めの部分だけここにぬいて見る。

ながらふべきか但し又

ながらふべきに非るか

爰が思案のしどころぞ

運命いかにつたなきも

これに堪ふるが大丈夫か

又さはあらで海よりも

深き遺恨に手向ふて

之を晴らすがもののふか

どふも心に落ちかぬる

扱も死なんか死ぬるのは

眠ると同じ眠る間は

心痛のみか肉體の

あらゆるうめき打捨つる

是ぞ望のはてならん

——矢田部尙今譯

死ぬるが増か生くるが増か 思案をするはこゝぞかし

つたなき運の情なく

うきめからきめ重なるも

堪へ忍ぶが男兒をとこぞよ

又もおもへばさはあらで

一そのことに二つなき

露の玉の緒うちきりて

死んで眠りてそれぎりと

からきくるしき世の中を

さらりと去つて消え行くも

卑怯ひきの業わざにあらぬかや

——外山ゝ山譯

この中、矢田部の譯は十五年三月十五日發行の「東洋學藝雜誌」第六號（この雜誌は元來理學の雜誌であるが、文藝にわたる平易な文章をのせるのをまたてまへとした）にのせた。但しこゝにあげたやうに行を分たず、長歌のやうに書き下しにしてゐる。井上は所々に短評をはさんだが、それは翻譯の評でなく、内容の評である。つづいて第七號には外山のキングスレー作「悲歌」がのり、これも亦書き下しである。第八號（五月二十五日）の外山の「拔刀隊の歌」に至つてはじめて、行を分け、聯を分けてゐる。そしてこれが活字で發表された創作詩の最初のものである。

第一章 近代詩の草創

つた。(單行本にする時少し手を加へてゐる。ここでは雜誌の時のままにする。)

我は官軍我敵は

天地容れざる朝敵ぞ

敵の大將たるものは

古今無雙の英雄ぞ

之に従ふ兵は

共に慄慄決死の士

鬼神に恥ぬ勇あるも

天の許さぬ叛逆を

起しし者は昔より

榮えし例あらざるぞ

敵の亡ぶる夫迄は

進めや進め諸共に

玉ちる劍抜き連れて

死ぬる覺悟で進むべし

これは云ふ迄もなく西南の役を歌つたものだが、いつの間にか軍隊の軍歌として歌はれるやうになつたので、この一篇が軍歌の始めをなしたのである。

外山が創作詩をつくつたとなると、矢田部も負けてゐない。九號(六月)には「鎌倉の大佛に詣でて感あり」といふ一篇を作つた。この同じ號に坪井正五郎が「西詩和譯」といふ題で、押韻詩をのせてゐる。これもこの種のものとして公表された最初のものである。

いきの出入りとかからだの血　しかのみならずよき心地

清きたましひこれ命　時計のめぐりはやくたち

遽に變る針の位置　歳はすぐともわざとさち

なきは則ち無能無智　多く考へ氣をたもち

よきはたらきを爲せる後　長しと云はんこのいのち

十號（七月）には、矢田部がカムプベル「英國海軍の詩」の譯をのせた。この同じ月に「新體詩抄」が公刊されたのである。

「新體詩抄」が収めてゐる作品數は十九篇で、その中井上のはロングフェローの譯詩「玉の緒の歌」一篇のみ。あとは外山、矢田部の作及び譯で、創作詩は外山二篇、矢田部三篇、結局あとの十四篇が翻譯詩になるのである。いはゞ西洋詩の翻譯によつて、日本の近代詩の幕が切つておとされたわけである。

出來榮えはよくなかつたにせよ、意識的に新體の詩をつくらうとした井上等の意圖は高く評價すべきであらう。見方によつては、その序文にもられてゐる精神や意圖の方が、比重として

第一章 近代詩の草創

内容より重いといつてもよいかも知れない。「夫レ明治ノ歌ハ明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ」しかもその明治は過去をすてさつて、歴史を新しく興さうといふ時代なのである。「今日の日本人は、自身の過去については何も知ることを欲してゐない。教養ある人士も過去にひけ目を感じてゐる。ある日本人は……我等は歴史をもつてゐない。我等の歴史は今から始まるのだ……と叫んだ」(明治九年十月ベルツ日記)時代である。西洋の藝文を知るにつれて、詩が如何に尊敬され、ホーマー、ダンテ、シェークスピア、ゲーテ、バイロンと、第一流の藝術といはれるものがすべて詩の形をとつてゐるのを知り、これを日本に移さうと人々が考へたのは、西洋模倣のこの時代としてむしろ自然であつた。

即ち井上がこの詩集序に「泰西之詩。隨世而變。故今之詩。用今之語。周到精緻。使人翫讀不倦。……古之和歌。不足取也」と云ひ、矢田部が、「我邦人ノ從來平常ノ語ヲ用ヒテ詩歌ヲ作ルコト少キヲ嘆ジ、西洋ノ風ニ模倣シテ一種新體ノ詩ヲ作り出セリ」と書き、外山が「三十一文字や川柳等の如き鳴方にて能く鳴り盡すことの出来る思想は、線香花火か流星位の思想に過